

戦国時代の赤岩の渡

群馬県立歴史博物館 築瀬 大輔

はじめに

- ・ 関東の戦国時代 (時代区分) と利根川 (地域区分)
- ・ 「関東の戦国時代」 から 「関東平野の戦国時代」 へ

1 上杉謙信の小田原攻めと赤岩 (1560 年)

永禄3年(1560)8月、越後の長尾景虎(後の上杉謙信)が上杉憲政を奉じて関東へ攻め込んできた。上野新田の由良成繁と下野足利の長尾景長がいち早く景虎に従ったが、館林の赤井氏と小泉(大泉町)の富岡氏は北条氏支持を貫いた。北条氏康は富岡氏に鉄砲と玉薬を送り、赤岩に舟橋をかけて赤井氏支援の軍用路を確保した(館林市史332、334)。

2 赤井氏の滅亡と赤岩 (1561 年)

永禄4年(1561)11月に北条氏康・武田信玄の連合軍が松山城を落とすと、北条氏康は成田長泰ら北武蔵・東上野の領主を上杉方から寝返られせ、上武国境を押さえた。これに危機感をもった謙信は矛先を館林城に向けた。そして、翌永禄5年2月27日までに館林城を落とし、城主赤井氏を滅亡させた。城主赤井文六は孫娘(あるいは姪)の嫁ぎ先である成田氏を頼って落ち延びた(行田市史218)。謙信は引き続き下野佐野城に軍勢を進め攻撃を始めた。成田長泰は北条方の後詰めとして佐野城支援にまわり、謙信を撃退している(行田市史218)。

3 北条氏康の忍城攻めと赤岩（1565 年）

永禄7年正月の第二次国府台合戦で北条氏が勝利すると、岩付城では太田資正の子氏資を中心に北条方に傾き、父資正を追放する。そこで、資正は娘婿の成田氏長や由良成繁の支援を頼った。

これをみた北条氏康は、9月5日、成田攻めを断行する。関宿へ陣を進めていた氏康はそのまま進路を西へ取った。後北条氏の文書ではこの時の行軍を「成田筋を進み、忍と久下の間の清水の地に陣を張った」とある（行田市史 228）。永禄7年(1564)、北条氏康は進路を関宿から「成田（忍）」へ変更し、清水（行田市）に陣を置いて、忍城に対峙した。忍城の成田長泰から援軍を求められた館林の長尾景長は、利根川を渡り、成田領の「南河辺」に毎日兵を繰り出して、北条氏の動きに備えた（行田市史 228）。この時、氏康は清水の地理を「忍と久下の間」と表現している。それは清水と久下の間に元荒川の渡河点があったためである。氏康は荒川渡河点を背にして忍城を睨み、対する長尾景長は利根川の赤岩渡河点を背に忍城を援護したのである。このことから、荒川と利根川をまたいで、久下・忍・赤岩・館林をつなぐ道が存在した。

4 佐野城の攻防と赤岩（1567 年）

永禄10年(1567)ころ、佐野唐沢山城は上杉氏に接收されていたが、本主佐野昌綱が唐沢山城を奪還すべく、武蔵・相模の北条方の諸将とともに城を攻撃した。さらに、佐野衆を支援するために北条氏康が出馬して北進し、「利根川」の赤岩に舟橋を架けて上野に渡河し、そして佐野に向けて陣を構えた（館林市史 408）。赤岩は「佐野城の上武国境上の通路」として機能していたことになる。

これに危機感を覚えた謙信は、「越山」を断行、10月24日に三国峠を越えて沼田に入り、翌日「国中」に向けて進発し、両毛地域の諸城を通過しながら佐野に軍勢を進めた。続いて謙信は氏康の陣の至近をかすめつつ、赤岩の舟橋を破壊して退路を断った。10月27日の夜中、佐野城は上杉勢に制圧され、昌綱は藤岡城へ、大道寺氏率いる北条勢は岩付城へ退去した。戦況は上杉方の優勢に進んだが、佐野衆の抵抗を重く見たのか、昌綱の城主復帰要求を受け入れるかたちで停戦に持ち込んだ。そして、昌綱の子虎房丸を初めとする30人余りの証人を召し連れて越後に帰ったのである。

関東の政治情勢はこの事件を機に北条氏の優勢が確定的となり、さらにこの年12月の武田信玄の駿河侵攻（三国同盟の崩壊）を機に越相の接近が始まる。

5 羽生城の攻防と大輪（1574年）

天正元年（1573）2月以来、成田氏長は北条氏の支援を得て羽生城の木戸忠朝と広田為繁兄弟との戦争を続けていた（熊谷市史127・128）。窮地に立った木戸忠朝は、上杉謙信に再三救援を求めた。しかし、越中攻めに注力していた謙信は兵馬を関東に向けることができず、ようやく越山が実現したのは年明けであった。

謙信は年明けの天正2年正月に越山するも、利根川北岸の館林領に到達して北条氏政と対峙したのは4月であった。謙信は大輪（明和町）まで陣を進めるが、雪解け水で増水した利根川はまったく渡ることができず、羽生城救援を諦め、やがて帰国した（熊谷市史136）。氏長は利根川の力を借りて謙信の撃退に成功したのである。この年の夏、羽生城は成田氏長に落とされ、羽生・菖蒲領は成田領に併合された。

6 小泉城の攻防と古海（1583～84年）

天正11年（1583）9月18日、北条氏が厩橋城を落とした。これに危機感を強めた佐竹・宇都宮氏は、新田の由良国繁と館林の長尾顕長兄弟を反北条陣営に寝返られせ、北条方の小泉城富岡氏を攻撃させた。ここに関東の「南北戦争」とでも呼ぶべき戦争が勃発した。12月から翌年2月までは、佐竹・由良・長尾・佐野氏が小泉城の富岡秀長・氏高を再三攻撃したが、富岡氏はこれを撃退している。北条氏が成田領の善ヶ島付近から小泉領古海に舟橋を懸け、富岡氏の支援体制を整えていたためである（熊谷市史61）。

3月になると、宇都宮・佐竹氏が小山周辺まで出陣し、対する北条氏が足利まで北上した。両陣は互いに下野大道（足利・小山間の中世東山道）を進み、5月上旬に三轟山（佐野市）をのぞむ越名沼（佐野市・栃木市）の湖畔で向き合い、膠着状態のまま八月まで睨み合いを続けた。むしろ合戦は小泉領の利根川渡河点である古海周辺で激しさを増す。6月2日と7月19日に由良氏と長尾氏が古海を攻撃するが、渡河点を守備する北条家の大藤政信がこれを撃退している（館林・520、526）。この間、北条氏が成

田領（史料では「忍領」）から古海へ小泉城の将兵の兵糧を輸送し続けていた（行田・322）。ちなみに、北条氏は小泉から当麻（相模原市）までの伝馬手形を発行しているが、この時の利根川渡河点は古海と考えられることから、北条領国の公用路として機能していたことがわかる（戦国遺文後北条氏編 3433）。これに対して、北関東連合は由良・長尾兄弟の小泉城攻撃を有効に支援することができず、7月23日に沼尻の両陣営本隊は陣を引くことになった。

7 北条氏の館林領侵攻と「越河の仕置」（1584年）

天正12年（1584）12月、北条氏照は小泉合戦を勃発させ、沼尻合戦の原因をつくった由良国繁・長尾顕長兄弟の新田・館林領への侵攻を開始した。12月10日、氏照は成田氏長を主力とする軍勢を成田領から移動させ、下野藤岡（栃木市）に集結させると館林城の明け渡しを迫った（行田市史 324）。氏照は渡良瀬川に舟橋を懸け、館林領へ入部した（館林市史 541）。年明けの正月10日、氏直が館林城に入城し、城主長尾顕長と対面した（館林市史 546）。

氏照は配下の軍勢に対し「越河に就き仕置の条々」なる文書を発給している。その一例として、上野箕輪衆の星名小隼人佐に対して12月24日に発給されたものがある。この文書は六か条の条書からなる朱印状で、来るべき渡河作戦の心得と任務に関する定めがその内容である。これによると、翌25日に「越河」を断行すること、「川向館林領」における濫妨狼藉を禁止すること、各物主は「道作」と「船橋之警固」のための人足を差し出すことなどが定められている。

8 北条氏直の館林入城と赤岩（1585年）

天正13年（1585）正月4日、北条氏照は館林城に入城。10日には当主氏直を館林城に迎え、氏直と顕長との面会を実現させる。そして、氏直の館林滞在中の正月14日、氏照と氏邦の指図で長尾顕長と幸手領の一色中務大輔に対して次のような指示を出している。

【史料1】 北条家朱印状

川北其方領分赤岩・さかまき舟越、河東在陣の間は、堅く停止すべく候、舟橋一ヶ所申し付け候間、早々に奉行を指し越され、在陣中は船を引き上げて置かるべく候、仍ってくだんの如し、

(天正十三年) (虎朱印)
乙酉

正月十四日 (北条氏邦) 奉之
安房守

(顯長)
長尾新五郎殿

【史料2】 北条家朱印状写

まくち御領分の由に候、河東在陣の間は、船渡・往還共、堅く停止せしめ候、船を引き上げ、指し置かれ、よくよく仰せ付けらるべく候、舟橋一ヶ所に定め置き候、仍ってくだんの如し、

(天正十三年) (虎朱印影)
乙酉

正月十四日 (北条氏照) 奉之
陸奥守

(大)
一色中務太輔殿

氏直の館林領在陣中の正月14日、北条氏邦が利根川の赤岩と酒巻の渡舟の運行を禁止し、上武国境の通行を舟橋一箇所のみ制限するよう顯長に命じた(館林市史63)。これを受けて、顯長は領内赤岩の渡船運航を停止するよう、赤岩の地侍、もしくは長尾家の奉行人と思われる小菅又右衛門尉と宮内孫左衛門尉に命じている(館林市史65)。おそらく北条氏は同様のことを利根川対岸の酒巻の渡を管理する成田氏長にも命じたと考えられる。

氏直は居城である新田金山城と館林城を没収し、2月までにそれぞれ桐生城と足利城へ退去させた。館林城主となった後北条氏は城領となる村に掟書を発令し、直轄領の編成に着手した。

9 赤岩、そして妙印尼がつなぐ絆

天正18年(1590)小田原城の開城後、秀吉は宇都宮に動座し、そこで関東の新しい

知行割りを定めた（宇都宮仕置）。その結果、由良国繁・長尾顕長兄弟と成田氏長は幸運にも改易を免れた。翌天正 19 年、由良国繁は常陸牛久の「当知行」が認められて移封、成田氏長は改易となった那須晴資の遺領下野烏山領（那須烏山市）に入部し、両名とも豊臣大名として再生したのである。その背景には、山中長俊や浅野長吉の取りなしがあったと思われるが、由良・長尾兄弟の実母、成田の義母である妙印尼の存在にも注目したい。

妙印尼は旧館林城主赤井氏の娘であるが、由良成繁に嫁いで、国繁・長尾顕長兄弟、そして成田氏長の妻となる女子を産んだ。兄弟が後北条氏に反旗を翻すたびに命脈を保ってきたのは、母妙印尼の巧妙果敢な立ち回りがあったからである。宇都宮仕置に関しても、秀吉とのよしみをいち早く取り付け、息子を常陸牛久領（牛久市）の豊臣大名として甦えらせている。氏長の大名取り立てにも、義母妙印尼が一役買ったと見ることはできないだろうか。と言うのは、氏長の娘「於甲斐」は妙印尼の孫になるが、秀吉の側室に差し出され寵愛を受けたという説があるからだ。

おわりに

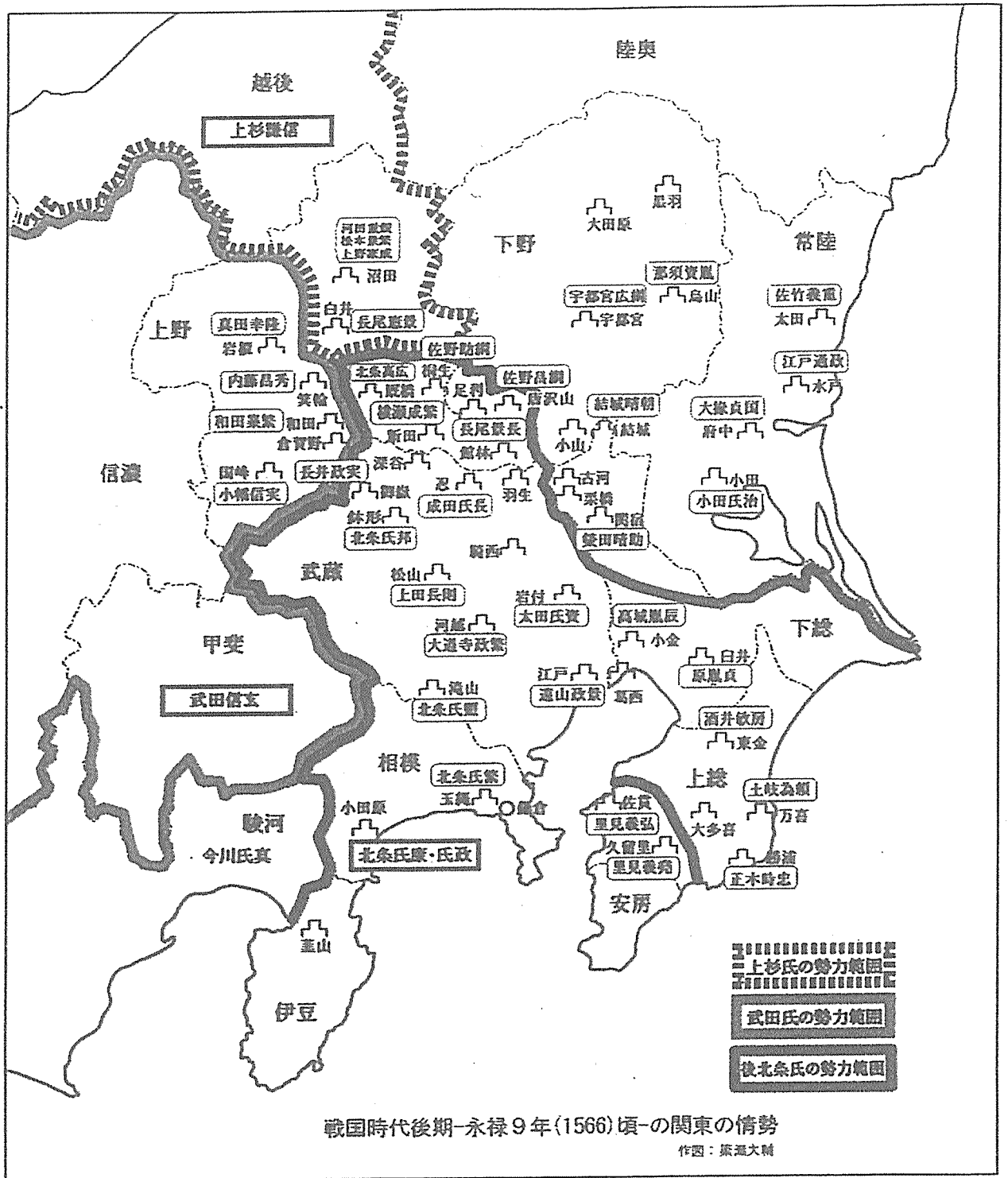
★「渡河点寺院」ということ

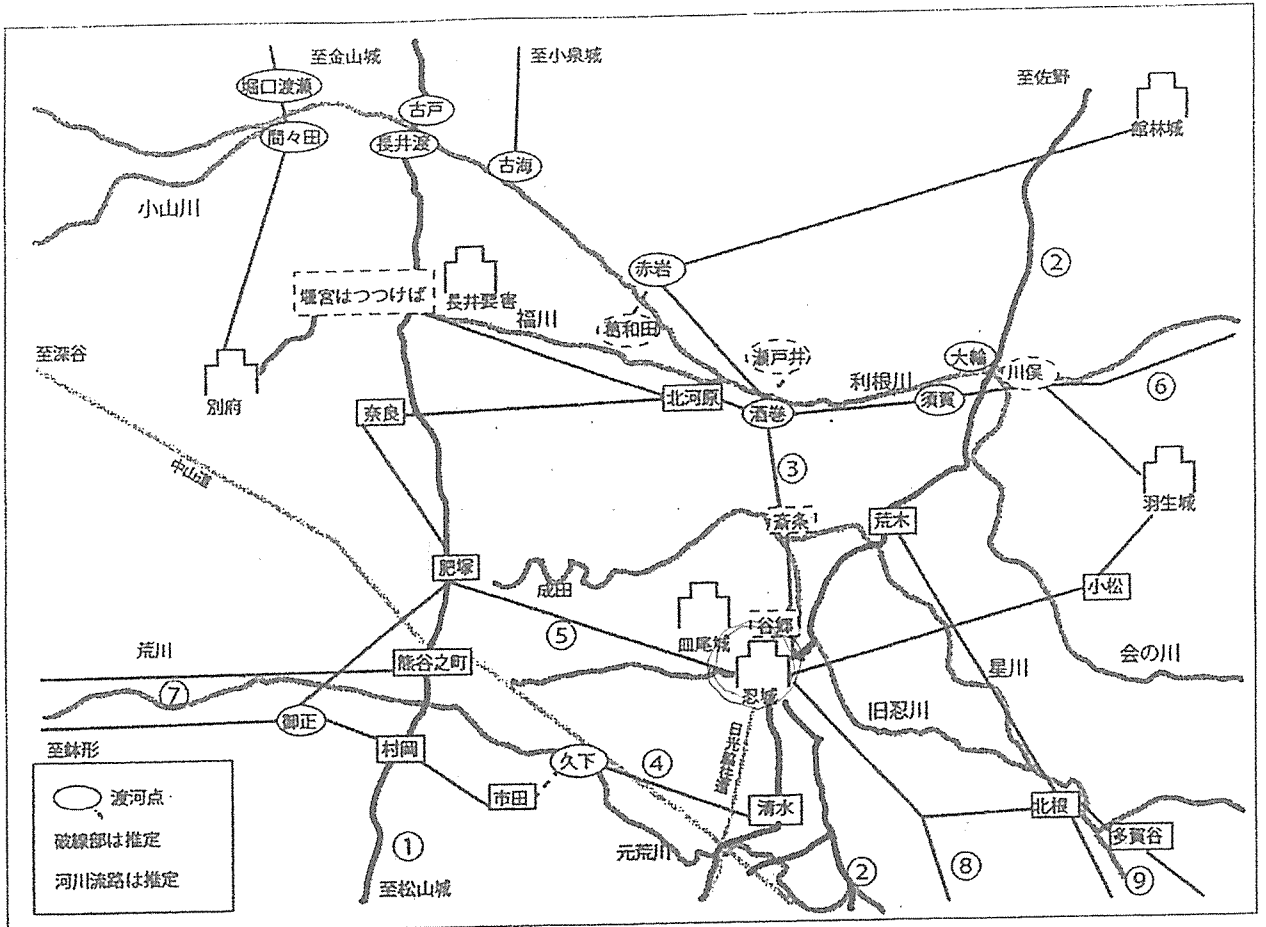
利根川の主要渡河点には、柴と泉龍寺（伊勢崎市）、世良田の長楽寺（太田市）、長井の聖天堂（熊谷市）など、渡河点と寺院がセットになって地域の中核的な集落（中世の町場）を形成している例がある。史料は多くを語らないが、中世の赤岩の渡しと光恩寺周辺にもそのような機能を想定してよいだろう。

★「リバーサイド・ランドマーク」としての中世寺院

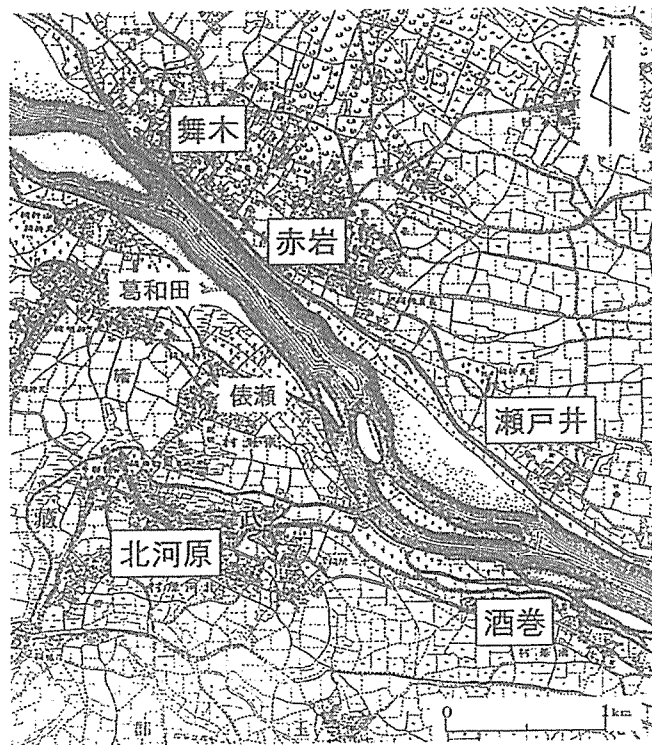
利根川を行き来する、あるいは利根川を渡る時の交通上の目当て。

境内林、古墳、自然堤防、関東ローム（赤岩、赤石、赤坂、赤羽…）





【図2】 忍領内の交通路



【地図●】 赤岩・酒巻周辺の利根川流路

□ は中世史料で確認できる地名
明治27年測量迅速測図 小泉村(部分)に加筆